

教育における人間中心のアプローチを求めて

- プレイ・マウンテン・プレイス校に学ぶ -

山下和夫

人間関係研究会「人間中心の教育 8号」1991

1. はじめに

子供の自発的な学習意欲を發揮させる教育はどのようにしてできるであろうか。これは、おおきなテーマである。今回、C.R.Rogersの人間中心のアプローチに大きく影響を受け、40年の歴史をもち、着実な成果をあげているロサンジェルスLos Angelesのフリースクールにインターンとして滞在することができたので、その報告をしたい。名前はプレイ・マウンテン・プレイス(Play Mountain Place)である。滞在期間は1988年10月28日から1990年3月23日の約1年半である。

2. 現状把握

概要

場所は、ロサンジェルス。国際空港より自動車で約15分。住宅街にある。民家を改造して作ったこじんまりとした学校である。一見すると、普通の家のように見える。私立学校にあたり、オルタナティブ・スクール(もうひとつの学校)の一種類である。就学前保育、幼稚園、小学校にあたり、ここを出ると小学校を卒業したことになる。どこからも資金援助は受けていず、すべて授業料でまかなっている。

PMP発行のパンフレットより歴史に

ついて紹介しよう。

PMPは1949年にフィリス・フレイシュマンにより自宅を改造して開設。当初は就学前の子供達を対象にしたプレスクールであった。もっと個性を尊重し、感情の表現を重視し、友情と協調を重視し、自分と他人に対する信頼を育むような教育を自分の子供に受けさせたいというのがその動機であった。

その後、10年間で、幼稚園、小学部を開設していく。スポートニクショックで成績重視、タイトな教育が主流になる中で、その流れに反対する親たちの要求によってPMPが大きくなっていった。その過程のなかで、ヒューマニスティック心理学のC.R.Rogers、イギリスのサマーヒル学園の影響を受けていく。

その教育の目的は、ひとつは多文化、多人種、社会的経済的な多様性のある教育的環境作りである。それにより、子供達に社会的な問題について目を開くようにしている。もう一つは権威によらない教育である。子供の学習意欲や能力への信頼、人間どうしの葛藤解決(Problem Solving)、知的な部分の学習のみならず、情動部分への援助、特に怒りの感情の解決への援助を目的とする。

また、PMPではユニークな教師訓練

プログラムも作り上げてきた。インターン制度というのがある（毎年5人のインターンを置くことにしている。）、校舎の一部屋を貸してもらって実習を受けることができるプログラムである。独自のサポートシステムにより、インターンの学習を促進している。世界各地から人が集まってきていて、なかなか国際的な集団となっている。私がいるときにも、日本をはじめとして、インド、マレーシア、イラン、ノルウェー、ウルグアイなどから集まってきていた。このプログラムが、ロサンジェルス市の公立学校、オルターナティブスクールへ影響を与えてきた。

現在の教育の流れは再び、成績重視で、権威的で、固定的で、構造のはっきりしたカリキュラムをめざす流れであるが、その中でPMPはユニークな位置を保っている。

1990年3月現在、90名弱の子供達が学習している。年齢は2才から11才までである。子供のグループ構成は(表1)の通りである。各グループは約20名ずつである。年齢については厳密ではない。ナーサリーヤードとマウンテンヤードは建物によって仕切られていて、混ざらないようになっている。マウンテンヤードではグループは固定的ではなく、混ざり合って学習している。また、先生の許可をもらって各グループを行き来することができる。

スタッフの構成については(表2)の通りである。上記の各グループに2名の先生とインターンとペアレントの補助がいる。子供20名に対し、大人4人とい

うかなりの高比率である。従来の学校のようなタテの組織ではなく、人間中心の完全なヨコの組織で、Directorは命令を下す人ではなく、必要に応じて意見の調整をする役割である。さらにスタッフの情緒的な問題をも援助をするところが従来の学校との大きな違いである。この中で、Parent Participant というのは親でスタッフの援助として参加するものでこれによって学費が免除される。

生き生きと育つ子供達 - 子供達の学習の様子 -

PMPの子供達はとても生き生きとしている。学校の中に子供達のエネルギーがあふれている感じである。それを時間的に追ってみよう。(表3参照)

登校については、無理強いされることはない。土曜日、日曜日は休みである(アメリカではすでに週休2日である)。8時から学校は開いていて、この時間は早く出勤しなくてはならない親のために子供を預かるピフォワーケアの時間である。スタッフは8時半に集合し、準備をすることになっている。9時から9時半までは、いわゆる登校時間で、親の自動車に乗せられて、集まってくる。リラックスした雰囲気、ぼつんぼつんと集まってくる感じである。学校へくると子供達はそれぞれ自由にやりたいことをやり始める。親と先生は必要に応じて子供の事について情報交換をする。この30分という時間は適切な時間で、このあいだに次のモーニングミーティングへの心の準備ができて行く。

9時半から10時まではモーニングミ

ーティング。1日のプランを決める大事なミーティングである。このミーティングへの参加は義務づけられていて、入学の際の子供との約束事項に入っている。表4のような項目が設定してある。中でも主な項目は、PROBLEM(問題、困ったこと)、PLAN(計画)、SHARING(分かちあい、聞いてほしいこと)の三つである。図のような表が黒板にかかれてあって、ミーティングのはじめに発言したいことがある子は、自分の名前をサインすることになっている。そして議長がサインのある子どもを指名し、順番に発言していく。普通左の項目から順番に進めていく。もちろん大人もサインができる。「問題」の例としては、「大事な首飾りをなくした。引越しをするので困る。」等ある。大人の発言としては、「掃除をしなかったので、学校が汚くて困った。」とかである。人が困っていることはとても大事にしているので聞いていない子供達がいたら妥協せず、聞くまで次の発言にはいかせない。「計画」の例としては、「砂場で山を作って遊びたい。松の葉を燃やして遊びたい。レスリングをしたい。ダンスをしたい。ラジオを分解したい。」などなど子供らしいものが飛び出してくる。「分かちあい」の例としては、「歯がはえてきた。この休みに旅行にいった。こんなものを買ってもらった。」などである。

さらに、先生が子供に提供していくプランもあって、それらは小学校低学年までは別枠で黒板に提示してある。算数、国語、科学、ダンス、音楽、アート、木

工など様々である。瞑想、ヨガといったユニークなものもある。大きな流れは、事前に計画してあって、その時々で臨機応変に変化する。各プランへの参加はもちろん自由である。ミーティングの時にやりたい子供はサインをすることになっている。先生が「算数のプランをやりたい子」と聞くと「私も、私も、(Me! Me! Me!)」と喋り手が上がる。大人が提供するプランと子供が進めていくプランがPMPではうまくバランスしている。

ミーティングが終了したらいよいよ各自の活動が始まることになる。食事は好きなときに食べてよい。先生リードのプランと子供の自発的なプランがそれぞれ進行していく。次はその活動の一端である。PMPには大きな砂場があり、そこで大きな山を作り、ホースを中にいれ、水に赤い色をつけ、火山の噴火のようにしている。子供達の目はキラキラ輝いている。バスケットボールに熱中する子もいる。古い松の木があり、そこからロープで作った長いスイングがぶら下がっているのだが、それを使ってターザンごっこをする子もいる。ロープをよじって駒のようにスピンをすることもできる。何回スピンしたか得点表を作っている子供もいる。子供のお気に入りの道具である。決して他の子と競争することはなく、自分が何回できたか数えているだけなのは驚いた。障害物コースを作ってそれを通過して遊ぶ子供達もある。店を自分達で作り、おもちゃを売ったり、作った料理を売ったりしている。これらの活動は承認されていて、収入は一部PMPに支

払い、自分達の小遣いにもなる。とつてもユーモラスな人形を持ってきて、それを見せ合い、大声で笑い合っている子供。虫眼鏡を持って、草むらに入り、いろいろなものを発見し、興奮する子供。将来生物学者になって世界の事を研究するんだという。

先生が差し出すプランにも楽しんで取り組んでいる。目を輝かせて貼り絵のプランに取り組む子供。この子は以前他の私立学校にいてうまく行かずPMPに来た子なのだが、こんな形で少しずつ元気を取り戻して行く。算数にも喜んで取り組んでいる。

こんなふうで、エネルギーが充満し、夢があり、希望がある感じだ。躍動している。子供達の目の輝きが違うように思う。

こんな雰囲気の中で学習が進んで行くのであるが、その学習にはあるパターンがあることに気づいた。ある時は本を読み、それにあきたら次は砂場に移って遊び、次は、カード遊びをし、なわとびをし、先生がしているプランに入って何かをするという具合で、一つ一つの周期は短いのだが、興味にしたがって動いていて一瞬一瞬熱中しているものだから確実に身についていくのである。体系的ではないのだが、それらが積み重なって、相乗効果で子供の中で統合されていくといったらよいのだろうか。こんな例もある。日本語クラスを担当した時のこと。子ども達の希望でこのクラスはスタートし、挨拶をおぼえたり、歌を歌ったり(メリーさんの羊を日本語で)、日本

語でビンゴゲームをしたりした。しかし、都合で2、3回しただけであって、その年度は帰った。そして、次の年度。子ども達はちゃんと覚えていて、それを歌ってくれたのである。また、あいさつも次々と広がって行って、大人までがそれを覚えている。こんなふうに興味にしたがった短いサイクルでの学習が積みかねなっていく、その学習が波紋のように広がっていくようなのだ。

算数や国語などのいわゆるアカデミックな領域においてもこのような学習は進んでいくようである。PMPではイメージをとまなつて学習が行えるように工夫している。算数においては午前中に30分授業時間を取っているが、その中では、積木を使って数の概念をおぼえさせたり、ビンゴゲームやトランプゲームをしたりしている。どれも計算のよい経験になるからである。また、このような授業時間以外にも遊びの中から学べるように工夫している。一例をあげると、子供達の遊びの場の中に、クイズの形でブロックをおいておいて、気が向いたら考えることができるようにしてある。時々立ち止まって友達同士で、考えあっていた。国語においては午後30分授業時間を取っている。その中では、楽しめるような授業内容になるように工夫している。例えば、替え歌を作ってみたり、絵本にして物語を作ったりである。また、算数と同じで、このような授業以外にも普段の遊びの中で文字に親しむようにもしている。バスケットの中に動物の人形がいられてあって、机の上に単語を書いたカー

ドを並べ、その上に動物をおいていく遊びをしたり、壁とかにいろんな言葉を書いた紙をたくさんはっておき、文字に親しむ雰囲気を作ったりしている。ニュースやポスターなども種類をどんどん変えながらはっていつている。

一般にPMPの子供達は字が読めるようになるのは遅い。しかし、いったん読めるようになり始めるとその学習スピードはとても速い。少しずつ頭の中にその回路ができていって、それが蓄積され、一気にわかるのだ。自由な雰囲気の中では、自分のペースで自然に学習が進んでいくようである。卒業してからも問題はないようで、最初は戸惑うらしいが、徐々に慣れて行き、初年度の終り頃にはすっかり追いつき、トップの成績をとる子も多らしい。嫌々学習した経験がないので探求することの楽しさやコツを体で覚えているのである。

さらに、トリップの日もある。PMPの中だけでは情報に限りが出てくる。そこで、どんどん外へ出ていく。ビーチ、博物館、図書館、社会施設の見学に行ったり、ダンス、ミュージカルを見に行ったり、キャンプをしたり、友達の親の勤めているところにいったりもする。人数の少ない学校なので、気軽に出かけていける。

2時45分までこの活発な活動は続き、クリーンアップタイム。全員で掃除をする。親たちが迎えにきて、3時には下校することになる。6時までにはアフターケアというのがあり、働いている親たちのために子供達を預かることになる。

ピフォワーケアとも料金は別料金である。

3時半からはスタッフ達は研修の時間となり、図書室に集まり、研修し合う。PMP独自のユニークなプログラムである。

大人の適切なサポート - フリースクールの方法論 -

このような活動は大人達の適切な配慮により支えられている。

まず、物理的な環境づくりである。リラックスし、思わず遊びたくなるようにするのだ。ヤードに大きな松ノ木があり、適当な日陰を作ってくれ心身をうるおしてくれる。その松ノ木に登って遊ぶこともできる。そこからスウィングがぶら下がっていてターザンごっこもできる。グラウンドはもちろん砂地。校舎は民家を改造したもので何ともいえない暖かい雰囲気を醸し出している。40年間使い込んできた暖かみというかそんなものを感じさせる。きわめて人間的なのだ。

こういう心地よい環境の中で次のサポートがある。先生の役割に、(1)子供達の活動を見守り、援助する。(2)自ら子供達にプランを提供し教えるの二つがある。その日の分担は事前に話し合っで決める。なかでも(1)の活動を見守ることは特徴的で、大きく分けて、1. 学習環境の設定 2. 情緒部分への援助 3. 葛藤(もめごと)の解決の援助がある。

1. 学習環境の設定。このすばらしい環境を状況に応じて変化させていく。例えば、子供達の気持ちが高ぶってきたり、

ストレスが貯ってきたら日の当たる暖かいところにマットレスをだしてきて、そこで遊ぶようにさせる。喧嘩になりそうになったら新聞紙で丸めた刀を出してきたり、人形を出してきたりする。機敏に察知し、少し早い目に環境を設定する。そのことで雰囲気が変わり、子供達が心地よくなるといった具合だ。

知識や情報においてもこれはいえる。具体的に目に見える形で、知識、情報を子供達に提供している。いたるところにローマ字を始め、日本語、スペイン語、地図、写真がはってある。地図や写真についてはいろんな文化に目を開かせるために、他国のものがたくさんはってある。これらは固定しているのではなく、状況に応じて、提供し、変化させていく。例えば、スペースシャトルが打ち上げられたときは、机の上に地球儀をセットし、シャトルのおもちゃを上からぶら下げ、シャトルが地球を回っている姿を展示するというぐあいに。柔軟で、目で見て楽しいように情報を提供している。日々の遊びの中で、このようなものが目に入り、知識として蓄積されていくわけである。この情報の提供の際に、PMPでは各文化の多様性に目を開き、人種差別や偏見をなくすような観点に留意している。日本に関するものもした。節分の豆まき、子供の日のこいのぼりなどであった。

2. 情動部分への援助。PMPでは人格の成長と学習とが統合されていると言ったら良いであろうか。このような援助を大事にしている。ここのスタッフ達はロジャーズが示した成長促進的条件を身

につけている。

大人も子供も感情（Feeling、気持ち）をととても大事にしている。どの感情も、持ち、表現することが許される。もっとも表現の場合は、相手を尊重する形という条件が伴うが。子供の持つすべての感情に共感的に理解しようとする。（「アクティブリスニング」）。PMPにはこの雰囲気が満ちあふれていて、安心して自分自身でいられるというか、何とも心地のよい雰囲気である。また、「怒り」の感情の処理も大事にしている。「ムッシュエリア」というのがあって、そこは囲まれた空間で、段ボールの箱やバットやポリタンクや人形などが置いてあって、そこでは遠慮無しにものをぶついたり、壊したりすることができる。心おきなく怒りの気持ちを発散することができるようになっている。

3. 葛藤解決。

誰かとの関係で、傷ついたり、嫌な思いをしたことも大事にされる。すべての人がこの気持ちを表現することができる。英語では「NOT O.K.」という便利な言葉がある。お互いがこの気持ちをとても大事にしている。誰もがこの「NOT O.K.」を主張することができるのである。リミット概念である。大人も子供もまったく同様である。大人の「NOT O.K.」の気持ちは大事にされている。大人には子供の安全や成長を見守る責任があるからだ。このとき、「してはいけない。」というのではなく、「あなたが・・・すると、私は・・・とを感じる。」という表現をするようにしている。子供の判断を尊重

した態度の表明である。(「私メッセージ」)。安全に関してのリミットは絶対である。「何人までのぼれる」とか「大人と一緒につかうこと」とか「外に出るは行けない」とかの制限事項が存在しているし、大人がみて危ないと感じる行動は遠慮なく止めている。もちろん子供からも大人に対して嫌な気持ち(NOT O.K.)は遠慮なく表現できる。さらに、葛藤が続くときは、すぐにミーティングを持ってお互いの気持ちや考えを表現し合って、解決していつている。当事者とその解決を援助する先生(ファシリテーター)とで成り立つミーティングである。これを「Problem Solving」(葛藤解決)と呼んでいる。子供達は日々の学校生活の中でこのようにして葛藤を肌で経験し、その解決を学んでいるわけである。

また、「契約書」というのがある。子供達はPMPの共同の部屋を自由に使えるのであるが、それには、契約書(Contract)が必要である。子供達は、時間、使用者、掃除をすること、先生にそれをチェックしてもらうことなど紙に書いて、終りに必ずサインをする。これではじめて共同のものを使うことができる。もちろん守られなかった時の罰則はないが、ミーティングを持って先生の意図を理解させるようにしている。また、入学に当たっては、同意書(Agreement)を作成している。

このようにPMPでは、権利と責任がとてはっきりしている。西洋の契約社会に深く出会った気がした。ただ、自由にしさえすればよいというものではない

のである。

3. まとめ

以上がPMPでの学習の一端である。ここで、PMP滞在を通して私なりに考えた人間中心の教育に必要な条件についてあげる。

1. 安心して自分自身でいることができる。

Rogersによってあきらかにされた、成長促進的な心理的風土がその基本である。強制、審判なしにその子本来が尊重される。

2. 自発的な遊び。これは言うまでもないことである。子供達の心身の健康、創造性の源である。大人の遊び観の押し付けではなく、あくまで自発的であることが大事だ。

3. 社会性の育成。信賞必罰によらない、より本質的な社会性の育成をめざす。感情と行動とを分けて捉え、感情については無条件に尊重しようとするが、行動については差し支えのある行動ははっきりさせていく。「私メッセージ」、「葛藤解決」のミーティングをとおして、日常生活のなかから葛藤を体験し、その解決を肌で覚えていくのである。

4. 探求心の育成。日常の遊びからその心を学んでいく。同時に大人からの子供に適した情報や資料の提供も大いに必要である。これがないと子供達が伸びない。構成的な授業もこういう雰囲気では強制のない形で行われるならば、その本来の良さを発揮する。

5. 自治的な共同経験。子供達が自発的

に共同で一つのプロジェクトを完成させる。そのよりよい経験の場を提供する。

なかでも、(1) がもっとも基本的な条件になる。以下の条件が人間中心になるかならないかはすべてこの条件次第である。

4 . おわりに

まだまだ伝えたいことはいっぱいあるのだが、紙数の都合もあるのでとりあえずここまでにする。最後に私が特にここで学習してよかったと思う点をあげる。

1 . 子供を活かすためにスタッフ達が研究に基づいた綿密な配慮をしていること。つまり、フリースクールにはそれ独自の方法論があること。

2 . それに応えて通常の学校では考えられないほど子供達が生き生きとし、その本来の学習意欲を発揮していること。つまり、子供は本来学習したがる存在であることを肌で感じたこと。

3 . 自由の尊重と共にリミットをととても大事にしていること。受容できない行動については妥協なしにそのありのままを提示していること。これには強さが要求される。「自由」という言葉を、ただ、強制しないという面でのみ捉えていると、この教育は失敗に終わるであろう。

以上である。このユニークな教育活動について活字という方法では十分に伝えられないようで、はがゆい思いでいっぱいであるが、それが少しでもつたわり、人間中心の教育を進める上で参考になってくれればと思う。

(表1) P M P のグループ構成

- ・ ナーサリーヤード
 - リトルナーサリー・・・2才から3才
 - ビッグナーサリー・・・3才から4才、5才
 - キンダーガーデン・・・6才
- ・ マウンテンヤード
 - プライマリー・・・7才から8才 (ヤンガーキッズ)
 - エレメンタリー・・・9才から11才 (オールディストグループ)

(表2) P M P のスタッフ構成

- Head Teacher (主任) Administrative Staff (管理部門)
- Assistant Teacher Director
- Intern Assistant Director
- Volunteer Administrative Assistants
- Parent Partecipant School Maintenance
- Board Of Directors (9)

(表3) P M P の一日

- 9 : 0 0 ~ 9 : 3 0・・・集まる
- 9 : 3 0 ~ 1 0 : 0 0・・・モーニングミーティング
- 活動 先生リードのプラン(自由参加)と子供の自発的なプランが進行
- 午前 算数 30分
- 午後 国語 30分
- 2 : 4 5 ・・・クリーンナップ
- 3 : 0 0 ・・・親が向かえに来る
- 6 : 0 0 まではアフターケアがある

(表4) モーニングミーティング

	Problem 問題	Plan 計画	Sharing 分かちあい	News	Question
サイン	Kazuo Joe	Tom Ken Bob Judy	Marry Audry		